

第2章 本居宣長『古事記伝』③

前おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第三節 「である」と「する」「なる」の論理

第二節においては、宣長の「成る」の解釈と天理教の教語における「成る理」の意味の類似性にふれて若干の示唆をしておいた。宣長は『古事記伝』冒頭解説において「天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は」の「成る」に注目し、この言葉には、なかったものが生まれ出るといふ意味、何かのものが変わって別のものになるという意味、そしてなすことがなしおわったという三つの意味があると判読した。

ここで即座に一天理教者として思い出すのは、「タコツボ型」と「ササラ型」、「実感信仰」と「理論信仰」など、我が国の伝統から積極的な価値を引き出そうとした戦後日本の代表的な思想家と評価される丸山真男が『日本の思想』の巻末に載せているエッセイ2編、「である」ことと「する」こと―近代社会の論理一、「である」ことと「する」こと―日本近代社会の特質―という論考である。丸山の理論は「為す」「成る」の解釈を思想化できる天理実践教学の貴重な参考となる方向を示していることに間違いはないとわたくしには思われる。世襲か能力か、人格重視か成果主義かの二者択一における両者のバランスのなかで、個人であれ組織であれ、真の「である」ものの選択実践決断は「する」ことによって既存の「である」べきでない「である」「あり方」を改革する。

丸山はこの「である」ことと「する」ことの二つの典型の対照を明確にするため、徳川時代と現代とを比較し、社会の構成原理、つまり「どの要素が社会関係において決定的な役割を担っているか」について次のような「尺度」を指摘している。まず「である」社会においては「出生・家柄・年齢・身分」といった「素性」が「尺度」になり、組織を構成する人々の位置が「先天的」に決定され、それが個々人の現実の行動によって変更され得ないように、「する」論理は「である」尺度に対して二重の意味で無力となる。このような「帰属」の論理が支配している社会では、宮村治雄が言うように組織の行動様式や交際もまたそれに規定されて、「分」「分限」に応じた倫理意識や、「同郷」「同族」「同身分」相互の交際が基本的なものとして…そこでは「現状変更」は原理的に否定されていることになる（『丸山真男『日本の思想』精読』岩波書店）。それに対して「する」社会の構成原理は「目的の限りで取り結ぶ関係」が中心となるから、「関係は一時性を当然とし、役割の限定性や、時には相互置換性もみとめられる」。また「する」目的は多様であるから、多元的な役割意識が目的達成のためには求められるということにもなる。つまり、「である」組織では、社会的価値はなにに「帰属」しているかによって決定されるが、「する」社会においては、なにを成し遂げたか、いかなる役割を果たしたかによって決定されるという対称性が見られるというわけだ。

政治・経済・教育にかかわらず暗雲低迷する現世界の諸既成・新宗教団組織等々においても、存続発展か退廃かは、正しくあるべき知勇兼備かつ進取的で、「狂」の志士の「する」精神の有無しにかかっているのではないか。幕末の激変する時代状況の中で、天理教教祖が「狂」と罵られて「ひながた」の道を天衣無縫に歩まれた史実は、信者個人・集団を統率する組織者ともども常に忘れてはならない。いうまでもなく信仰者個人においても、「する」ことによる「成人」への「ひながた」の道を希求することは、「ひながた」の道を語るかぎり当然の目標としてある。天理教教祖は非凡の霊的救済者であったばかりではなく、「である」べき信仰集団の究極的「する」開拓精神経営者でもあったのである。したがって、「ひながたの道」における組織的「応法」の道への神の立腹は「おふでさき」十七号の結論

にいたる啓示において、その極致に至っているのが明らかとなる。

「おふでさき」1,711首の最後のお歌である「これをはな一列心思案頼むで」（十七—75）の「これ」とは、中山みきの生家、田村の村田氏、通称田甚の分家に養子に行った中山音次郎、平様は秀司の妻まつえの生家である平等寺村の小東家の三家を、非和歌体で73番に「里々田音々々平様々々」とあらわし、中山家の親族でありながら布教に対して熱心でなかったゆえに、たとえ教祖の親戚であっても、神は十分に守護することはできないとした厳しい内容の歌で、この最後にいたってあらわれる二首は「おふでさき」の中で例外的に和歌体で表現されていない形式として注目される。この異例な二首の間にはさまれたお歌74番は「この話合図立て合い出たならば何々ついても皆この通り」と記され、その意味は、事情・身上を例とした信者・組織それぞれへの思案のシンクロニシティ（共時的事象）発生 of 教理的平等救済思想を確認する予言的象徴としてあり、「おふでさき」全編を貫く個から普遍にぬける「ひながたの道」の真実であるとの神意が読み取れる。「おふでさき」の終わりの銚先は、この破格の和歌のかたちをもって元始まりに戻るのであり、その故にこの十七号最後のお歌は、その第一号の最初のお歌「万代の世界一列見はらせどむねの分かりた者はないから」に連鎖循環していると解釈される。つまり、教理書としての「おふでさき」には、過去・現在・未来を包摂した人類救済思想が螺旋的に凝縮していると見なければならぬと考えられる。このように考えをめぐらしてゆくと「思案頼むで」とは、必ずしも未来に向けてこれからの出来事に際しての思案に絞られたものではないという思いに駆られる。「おふでさき」における神の啓示はそのおわりがはじまりであり、はじめがおわりであるとの気づきが、時空間を超えた人類一列きょうだいとしての教への真理の普遍性を拝読者にあらわにするのであった。かつて「元の理」は「今の理」であると文化人類学者岩田慶治は見抜いたが、その独自のコズモロジカルな着想の慧眼には成るほどと感心させられたことが想い出される（『「元の理」の象徴学』講座「元の理」の世界2、天理やまと文化会議、1988年）。したがって、「これをはな一列心思案頼むで」との「おふでさき」最後の言葉は、未完成である「こうき」物語の完成を将来願われた意味を持つとする類推はいささか胆略すぎると思われるが、後ほど章をあらためて述べる。

この節の終わりにおいては、「おふでさき」の隠し持つ助動詞の論理構造の意味を掘り下げてもらえばと期待し、「である」と「する」「なる」が現れる「おふでさき」数首を引用しておきたい。

この世の真実の親月日なり
何か万の守護するぞや（六一—102）
この世は一列は皆月日なり
人間は皆月日貸し物（六一—120）
この世の地と天とは実の親
それより出来た人間である（十一—54）
この世の人間元を世界中
知らして置いた事であるなら（十二—129）

「なり」は古語で断定をあらわす助動詞「…である」「…だ」を意味し、「これは竜のしわざにこそありけれ、この吹く風はよき方の風なり」（竹取・竜の頸の玉）などを例として『古語辞典』（旺文社）では挙げています。ちなみに「である」という口語体が、日本の言文一致体沿革史における初出として「おふでさき」一号（明治2年）49番に見られることの意義についても、章をあらためて述べる。